

報



會

會 岳 山 本 日

22

月 一 年 八 和 昭

「道具オンチ」

松方 三郎

雑誌を手にとると、いきなり「編輯室だより」といつたやうな六號を讀む人は少くないと思ふ。困苦しい論文よりは人間味のより豊かな部分先づ開くといふのは人情の自然であらうか。私は同じやうな理由から「アルバイン・シヤール」を手にとると、何時も最初に雑誌風の「アルバイン・ノウツ」を斜に讀んでそれから物故した會員の追想記を讀むのを習慣としてゐる。

私がホウプの名を初めて知つたのは、一昨々年の秋此の雑誌に出た彼の追想記によつてであつた。尤も當時私は此の追想記が彼の三十年の伴侶であつたカーケパトリツクの手になるものであるとは知らなかつたし實を云ふと私は、その文章の中に書かれてゐた或る事柄を憶えてゐて、ホウプその人の名すらもすっかり忘れてゐたのである。私の記憶に残つた事柄といふのは、ホウプが道具の考案に特殊な才能を有る之に非常な努力を拂つたといふことである。氣球用の布で作つた總量七オンスのルツクザツクを彼が考案したといふことや、ピツクと傘とを必要に應じて附けかへることの出来る重寶な杖を發明して使つ居たといふこと、そして或る年メルテラツク水河の上で雨に遭つて、その秋に傘をつけたものだらうか。ピツクをつけたものだらうかと、大いに迷つたといふやう

な話を私は面白いこと、觀じて、此の人もアルバイン・クラアの老人などによくある凝り屋、謂はゞ尊敬すべき「道具オンチ」の一人だなと思ひ乍ら、度々此のことを憶ひ出してゐたのであつた。

ホウプ、カーケパトリツクの二人が恐しく優れたガイドレス・クライマーであつたといふことを知り、彼等が登山史上に重要な足跡を印した人々であるといふことを知つたのは

第五十八回小集會通知

日時 来る二月二日(木)午後五時開場
場 六時開會
場所 赤坂・溜池・三會堂

講演 秩父と其山村(參照地圖一三峰・金峰山・觀山・丹波・十石峠萬場) 原 全 教氏

映畫 五月の富士山・金剛山・上越國境・十二月の苗場山・一月の奥日光 會員 塚本閣治氏

尙、當日は種高の近況と本會建設の山小屋に關する報告あり、山小屋設計圖其他資料を陳列す。(角田)

(司會者神谷)

——全く恥しいこと乍ら——彼等の筆になる記録が最近一冊の本に纏められて出てからのことである。ストラットは此の書への序文の中で、登山史上の彼等の地位を短い表現を以て、併し充分に、説明してゐる。そして此のガイドレス・パーティーが三十年に亘つて、三百に及ぶ登攀記録を残し乍ら、遂に一度のアクシデントを惹起したこともなかつたことを特に述べた後に、彼等がどれ程に

綿密な山岳人であつたかを述べてゐる。ルツクザツクの荷物を出来るだけ軽くするために、行く先き／＼の宿屋宛に齒ブラシを締め送りつけて置いたといふやうな驚くべき物語もストラットによつて此處に書かれてゐる。齒ブラシ無しに一シーズンを暮すことを意に介しない人々は我々の間に少くないだらう。併し、ルツクザツクの中の齒ブラシ一本に迄顧慮を拂ふ人が我々の間に何人あるだらうか。ホウプやカーケパトリツクの場合、併し、此の齒ブラシ一本の有無は、彼等のガイドレス・クライム成功不成功の上に直接の因果關係を有する事柄であつたのであるに相違ない。謂ふ迄もなく、會つて私が單に面白い一挿話として記憶したホウプの所謂「アムブレラ・アイス・アツクス」なども、物好きの仕術どころではなく、大真面目な熟慮と研究との一成果であつたのであらう。

そしてたゞ私が寡聞にして漸く近頃になつて、その意味を知り得たにすぎないのである。

七つ道具を肩に堂々と停車場を繰り出す「道具オンチ」は多い。併し道具の有用性を増大し且つその目方を減少せしめることにホウプ等程の研究をした人が我々の間に居るだらうか。我々の持つ問題や材料を考へあはせる時、我々はまだホウプから學ぶべき多きを持つてゐないであらうか。若し之が私自身が自分の無性からホウプの事蹟に感じ入つた結果の見當違ひでなければ幸ひであるが。(八頁圖書紹介参照)

主要目次

★「道具オンチ」(巻頭)

★山岳研究講話……………松方三郎(一)

★苗場山外ノ川小舎附近のスキールートに就て……………吉澤一郎(三)

★於富士山故土屋勇氏遭難報告……………内田勇三(六)

★研究綱

1 コバに就て……………細野重雄(七)

2 スナールエツテスキ

一考察……………三澤龍雄(七)

3 魔法瓶の携行法について……………額田 紋(七)

★圖書紹介……………(八)

ALPINE DAYS AND NIGHT
臺灣山岳・山岳寫眞のうし方
スキー・アルペンカンレンダー・
陸地測量部新刊目錄

★山岳の消息……………(九)

★會員通信……………(一〇)

★第五十八回小集會豫告……………(一一)

★會員大會記事……………(一二)

★新舊理事送迎會記事……………(一三)

★登山團體調査追加……………(一四)

★昭和八年度集會日程……………(一五)

★事務所移轉・會費拂込み・入會金分納・入會手續の改正・特製えはがき……………(一六)

★山小舎委員會……………(一〇)

★會務報告……………(一一)

役員會、定例理事會、新入會員、退會者、新着圖書……………(一二)

山岳研究講話 1

今 西 錦 司

はしがき

私達が少年時代の純な、感じ易い心に山を焼き付けられたのが初めでそれから云ふのは始終山に惹き付けられ、又段々山に登つてゐる中に、山が私達にとつて親はしきものであり、私達は最早山と離れては生活出来ないと思はれてくるのは、皆さんも御同感であらうと考へます。

私達のこうした山との關係に於ける一生と云ふものは、それでどの様にして綴られるものでせうか。學生時代の自由な生活に較べると、その後に来るものは、大抵の人にとつては經濟的にも、時間的にも束縛の多いものと見なければならぬとせう。それは辛いけれども仕方がないスナークンさへ彼の結婚した年には The Regret of a Mountaineer を書いてゐるのであります。

それが登山史上の初登山であり、初登攀でなくとも、自分にとつて未踏の、或は未知の山岳を徹底的に追求して行ける人は幸福であります。けれども如上の事情で、私達がその興へられた範圍で行動するならば、一度訪れた山であつても、行かないでゐるよりは行つた方が気分が晴々すると云ふ様なわけで、不満はあつてもしよう、ことなしに又その山へ足を向ける。その結果がどうなるかと云ひますと、結局それでゐる益々そ

の山と離れ難い關係になつて了ふのではないと思はれます。

勿論登らずに眺めてゐる山に對しても親しみと云ふものは生じてくるでせうが、私達の山は登ると云ふ事が先づ最初の目的であります。それには肉體的並びに精神的な努力が必要であり、現金な云ひ方だがその拂つた努力が充分に報いられたと思ふ人でなければ、又山へ登らうなど、は思はぬに相違ない。處で初めの時と同じ丈の努力を拂つたとしても、二回目はその程に有難く感じないのが普通であります。その代り一度登つた山に對しては、眺めた山とは自ら異つた親しみを抱く事が出来る。それ故登山の感興とその山に對して抱く親しみとは反比例するものと云ひ得るのであります。

この事は最初登山を目的として選んだ山に對して、親しみを増すと、もに段々登山と云ふ目的の影が薄くなつて、寧ろ山そのものを目的とする様になると思ひます。例へば私行文の仲間によく論議する處ですが、紀行文と云ふ様なものも、自分の *First Experience* で書くのなら、大抵の人にはどうにかなりませんが、一度このことを書いた上で更に一度同じ道程を、同じ様な状態で通過して、これを再び紀行文として前のに劣らぬ様なものに綴ると註文されたら、閉口しない人があつてせうか。再遊記など云ふのを

讀んで見ても解る様に、その取材は主として何年前にはどうであつたのに、今度来て見たらこうなつてゐたと云ふ様な事の方が多く、登山そのものよりも寧ろ山岳の變遷が主となつてゐるのであります。従つて又去年と今年など云ふ事になると、そのつもりで見ても人以外には變化がわからぬ。唯山が戀しくなつた、親しみが出来たと云ふだけで、所謂地廻り連とか云ふものに仲間入りして案内記を書くのがまあ落であるかの様に思はれます。併し、もしその人がその地域に於いて、登るべき山もルートも登り盡したとしても、それらの山がその人の心にまで尙ほほんとうに親はしきものであつたなら、こそその人の新しき情愫が生ずるのではないでせうか。自分ばかりからこれらの山に對して何を爲すべきかと。

x

既に述べました様に、この場合の私達の目的は登山から山そのものに変つたのでありますから、山そのものを對稱とした行爲であるべきで、決してその部分に關するものによつて満足は出来ないものであります。と云ふのは登るべきルートがなくなつたから、改めて高山植物の研究を始めるとか、或はその山の地質を専攻しようとか云ふのではない。それも出来ないわけのものではありません。出来ぬ方面には夫々の専門家が頭張つてゐる事であり、又高山植物を採集したり、岩石を掻きつたりする事と、それを研究室で調べる事とは別々の人がやつてゐても大した差支へもない。又採集には採集家

とか採集業者とか云ふ類の人がゐる山は見なくても珍品を蚤取り眼で捜して歩く。駒草取りは登山家でないなら、こう云ふ人達も亦嚴密には登山家と云ふ譯に行かないでせう。私達山へ登る連中は是非やらればならぬ仕事とは、私達が實際に山で山の事を知り、それを系統立て、一つの知識として、社會に貢獻する事に思ひます。こう云へば如何にも威張つてゐる様に聞えますが、併しいくら山の事をよく知つてゐても、一生を岩角釣りに埋れて死んだ人達と同じ様に、登山家までかそれを自分のものとして持つてゐる丈なら、それではまだほんとうの知識とは云はれないだらうと思ひます。

x

この山の知識とか、又はそれを研究するとか云つた様な學問が、今迄に既に發達をとげ、或は何處かの大學に講座が設けられてゐるかと思ひます。私達にとつてまことに残念な事乍ら、そんな學問も、又そんな講座も、日本ばかりでなく、世界の何處へ留學してもないのであります。こゝに *Oregraphy* と云ふ言葉があつて、これに字引によつては山學など、云ふ譯を當てゝゐますが、これは寧ろ山岳地誌とでも名付くべき性質のものであつて、山そのもの、或は山で起る一切の現象を取り扱ふべきものでないものであります。山岳學はなくても海洋學ならあります。併しそれもあの海中に棲む豊富な魚貝その研究の範圍から取り除いて了つて、單に潮流の理や海水の化學的成分ばかり調べるものであ

つてみれば、その海洋と私達の眼に映り、頭に蓄く海とは全く似もつかないものになつて了ひます。之と同じ様に單に山の地形や、地質構造だけを研究する事を以つて、山の研究とは稱されぬ。寧ろ近時擡頭して來た陸水に關するあらゆる研究を包含する處の、陸水學の様な學問の方が、その性質上私の考へる山岳學に似たものであらうかと思ひます。

要するに山そのものに注意する以上、それは今日の大學に存する分科的な科學の範圍に止るわけには行かないので、一通りは氣象も、地質も動物も、更にそこに介在する人間的な交渉までも知らなければならぬのであります。山の自然地理と人文地理とを一緒にし、更にそこに佛蘭西學派の所謂「地的渾一」なる磨きを掛けた様なものになるのであります。現在の私の方では到底そこまで把握する事は困難であります。もと／＼私達の認める自然なるものは、諸現象が交錯しつゝ、然もその間の關係は秩序整然としてゐる筈であります。古い喻かも知れませんが、自然は一つの織物であり、そこに立派な模様が現れてゐる。けれどもその織物を形成してゐる色の異つた一本一本の糸を引き抜いて來て研究すれば、それが動物學になつたり岩石學になつたりはしても、元の織物の模様ではなくなつて了ふ。だから織物として、その模様のまゝで、その中から赤い糸なり、青い糸なりをトレスするのでなければいけないのであります。生物學方面では、こゝ云ふ學問を廣い意味で生態學と

名付けてみますが、その中でも或特異なる生活圏を選んで、その中に起る現象を研究するものにあつては、最早植物生態學とか、動物生態學とか云ふ對立を認める事は不自然となつて来るのであります。こう云ふ特異な生活圏として、湖水とか、沙漠とか、色々な単位を見出せようと思ひます。山岳も亦この一單位として充分なるものと私は認めるのであります。

×

最後に然らばどう云ふ方法を以つて、研究を進めればよいかと云ふ問題であります。私等の先人の中でも、こう云ふ態度で山を眺め、山の著述を残した人には、アルペンでは、Barlebach, Umlauf, Tschudi, Coe, Hidge, Bonney, 等を擧げる事が出来ますが、それらは餘りに古典的な Natural History の物語りに過ぎなかつたり、又はその見方が一方に偏り過ぎてゐたりしてゐるので、文献として必要であつてもそれをそのまゝに真似る譯にも行きません。自然を知る最良の方法は先づ四季の移り變りから注意する事です。それ故に私達は先づ何よりも山の自然の年中行事表を心得ておかれればなりません。例へば春先になつて、雪に押へられてゐた木の枝がバチンと音を立て、起き上つた。これは如何にも春の山をよく現してゐます。しかし少し注意してなれば、何時の春でも、何處へ行つても、雪に埋れた山林に見る現象でありまして、即山の年中行事に過ぎないのであります。文學者が山の春を描寫する爲には、この最

もボブエラーな現象を如何に巧みに記述するか、問題となるのでせうが、私達の場合は丁度その反對とも云ふ事が出来ます。それは春の山へ行つて、一度も木の起き上る音を聞かなかつた時にして、初めて私達は之をノートするからであります。尤も小學生時代の日記を讀んで見ますと、朝起きて、手水を使い、それから朝御飯を戴いたと云つた調子でありまして、これは矢張り、注意と經驗によつて習得して行くべき一種の技術と云へるかも知れません。かくして初心者が第一印象によつてもした紀行文とは、その着眼點もその様式もすつかり異つたもの、紀行文とは云へなくとも登山の備忘録が出来上るでせう。これこそほんとうに私達のものなのであります。

山は悠久であり、私達の生命は儂いけれども、私達はその短い一生の間で山に登れる限り、例へそれが、同じ山であらうとも、その山へ行つて山の事を知らうと努めたいのであります。そして私達の大多数には藝術的な才能の持ち合せがないから、唯忠實に知つたまゝを書き残さうと思ひます。そしてそれが取りも直さず山と云ふ悠久なもの、の *Life History* の一瞬であり、その *autobiography* の一頁に過ぎなくとも、それが私達の最も親しいそれらの山に對する、私達としての最も、美しい、賜り物だと信する次第であります。(續)

×

×

×

×

外ノ川小屋附近の スキールートに就て

吉澤 一郎



今度自分は正月の休みを利用して岳友松木、村尾の二君と共に此の地方に出掛け可なりに廣大なるスキーgebietを持つて居る事に今更乍ら感心をしたのであつた。茲に東電外ノ川見張所小鷹園三氏の説明及び自分の經驗を經緯となし、多少の解説を行つて見やう。

尙豫めお断して置きたいのは此處はズブの初心者に向かないといふ點である。附近には手頃なグレンデが無事、山は登り易が登つたが歸りに人が一度轉んで済んだ所を十通も轉んで居られたのでは一緒に持つたものが堪らぬ。之はスキー登山の通則ではあるがホーゲンの一つ位出来る人でなくては困る事と思ふ。

×

×

×

れから南に數町行つた所に十二大明神の鳥居と杜がある。八卷峠は此處から始まるのであつて右下にヤマキ澤を越下し乍らザグザグに登ると暫て頂上に着く。此處かう一寸降つて外ノ川の右岸沿ひに登るのであるが此の道と外ノ川の間の平をキヌダ平といふらしい。ガイロ川の小橋を渡つて暫く行くと左手に急に段の様な所を登つて右へ少し行つた所に外ノ川小屋宿法所があるのである。その地圖上の位置は四萬湯澤及び苗場山圖幅の合はさり目外ノ川の南千米突の等高級附近と思へば、間違ひはない筈だ。従つて地圖の點線の道は訂正する必要がある。

小屋は前記小鷹氏の妻ユキさんの經營といふ事になつて居る。風呂もあるし蒲團炬燵の類も完備して居るし、食物も中々に凝つてゐる。唯一の缺點は高度である、慈惠の小屋まで一時間半のハンディキヤツプは可成の痛手だ。

小屋を出て西南約三十分許り行くと右に急に一段登る所があるが此の邊までをイブリ平と云ひ、それから先ハラヒ川の縁までをハンの石と呼んで居る。一體慈惠小屋までの間は山毛櫛の森林の中に程良い距離を置いて杉が一二本づゝ立つて居るので之を目標にして登ればよいのだ。その間所々に慈惠でやつたもの思はれる赤い旗が太い樹に附いてゐるので大概の吹雪にも間違へる様な事はあつない。ハラヒ川(黒岩ノ澤以下を謂ふ)を渡る所は不動と云つて自分等は此處でスキーを脱がればならなかつた。渡つて小さな崖を登り、

暫く行つてもう一段登ると後は慈惠の小屋まで知らず／＼に出て了ふ様な緩傾斜である。此の小屋附近には稲荷清水と謂ひ、地圖上では三俣村の俣の字の邊ではないだろうか、その南の村の字附近はタモ木平と呼ぶ神樂の中央の突起へ出るには登高線の數字ある尾根通しに下ノ芝(一六五〇米突平)、中ノ芝(一八〇〇米突)上ノ芝(樂の字の邊に當る)を經ても行けるが、マキチ林道の分岐點邊りから清八澤の左俣に沿ひ、一六〇〇米突附近で神の字の尾根に移り神と樂の間北寄りから主稜の鞍部に取付くコースも中に優れて居る。慈惠ヒュツテより神樂まで登り三時間、降り一時間。

清八澤の本流のオキは雁ヶ峰であつて地圖のそれは木曾屋敷といふのが正しい事である。此の雁ヶ峰より木曾屋敷、高石を經て正八澤の尾根を降つて小屋に戻るルートも中々いゝらしい但し高石からの降りには新雪の直後でないとは高度の關係から雪質がパリ／＼になつてひどい目に遇ふかも知れぬから注意をしなければならぬ。

黒岩澤のオキに桐ノトツといふ名稱があるが之は三つ的小尾根の總稱であつて新雪が来た頃、芝原峠の方を見る所から斯く呼んで居るらしい。尙此の附近に小鷹氏に從へば大きな岩の岩壁(随分可憐な云ひ廻してある)が二つあつて大概の雪量では露げれるとの事、黒岩の澤名は之から由來してゐるのである。清八の北側の地

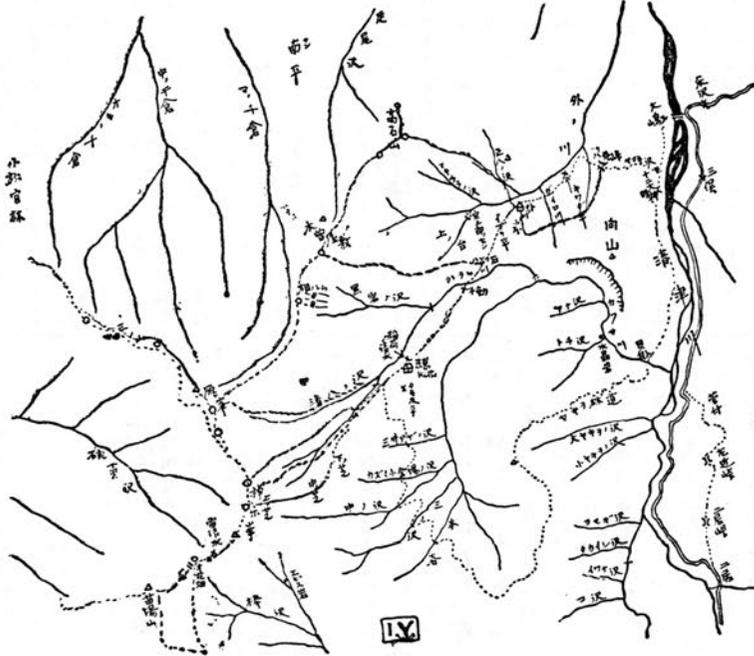
圖に記號の載つてゐる岩壁は自分等は之を認めたが少し雪が降れば隠れて了ふとの事。

次に高石山へのコースを説明する。之は山小屋を出て東電出張所のコンクリート建物から右に折れ夏道に沿つて行くと外ノ川の橋に出る。其から送電線の鐵塔目懸けてテカザカに登つてから今度は正八澤の領分に入り尙も山の腹につけられた夏道通りに行くとい寸した鼻が出る。此處は現在の送電線と電話線が頭の上で交叉する所、正八澤の本流とも云ふべき窪を新送電線は北上してゐる。斜左に舊送電線の切明けがあり、所々に鐵塔の倒れてゐるのを見る。此の鼻からグンと降りて正八の澤を渡り(小橋あり)一寸登つて新舊鐵索間の藪を左に抜けると舊切明に出る。此處の傾斜は可なり急である。

なるべく切明の右側を登る方がいと思ふ。自分達が此處を登つて居た時に途中ゴトといふ異様な音がしたので一寸見廻すと自分の直ぐ前に居た彌岡君が踏んだ雪の部分が裂けて小さな新雪表層雪崩を起したのであつた。幅約五間、切れ口から見ると厚さ約五寸、ほんの小さな雪崩ではあつたが響だけは可なり物凄いのがあつた。

前記の鼻から見ても一番上にある舊鐵塔から先は傾斜も緩く直ぐ吹晒しの小屋に来る。之は地圖の石の字附近である。此の邊一帶に非常に廣い傾斜も相當な斜面が展開してゐる天氣のいい日に小屋の傍にある鐵塔の上にも登つて此の邊りを快走轉廻する場面を「十六耗」にでも撮つた

苗場山外山附近概略圖



なら素晴らしいものが出来上るに違ひない。高石へ登る時に山岳部の現役の者にワックスを塗つて貰つて行つたが、どうも私如き前世紀のスキー乗りにはシツクリ来ない、山スキー等には結局昔の儘のアザラシとパライフィンだけが良相に思へる。但し之は原人の妄言として開流して戴きたい。

最後に苗場山と小松官林の事に就て述べ此の稿を終ることにする。

神樂から苗場に向ふには忠實に尾根を辿らなければならぬ。神樂の三角點から少し南西に降るとスキーは格向の幹面がある。それをい、氣になつて降つてしまふと棒澤の斷崖の上に出て落ちる事があるから非常に注意を要する。苗場寄り鞍部からは殆ど直立の傾斜である。之は積雪期には無理であるから右へ少しへつると小谷があるそれを登り詰めると下から見える岩峰の上に出るが

らそこで初めて夏道通りに頂上へ向ふのである。三月にはヒツケルを必要とする。又頂上までスキーをはいて行くとすれば鞍部より少し棒澤面に降つて苗場の東斜面をへつり東南に出てゐる大尾根に取付き山頂に出る。但し之は三月には雪崩の危険性が多い。

會報投稿規定

昭和七年度會員大會は十二月十日午後五時より赤坂三會堂に於て開催された。

先づ小島會長一場の挨拶をされて後白井博士を初め物故會員に哀悼の意を表され續いて鳥山理事より會計報告、櫻理事より庶務報告、松方理事より山小屋、山日記に就ての報告ありて六時半終了。

午後七時よりは講演會に移り、松方理事の外國の山小屋、角田理事の日本の山小屋及び洞澤に建設する本會山小屋に關する幻燈を併用せる興味ある講演あり。午後十時盛會裡に終る。

尙當日の出席者は

本郷常幸、加藤保二、福島昌夫、齋藤雄三、飛川維之、櫻井信雄、島田巽、谷本光彦、茨木猪之吉、戸塚武彦、市野瀧善四郎、吉田竹志、太田耳助子、叢信、美濃島藤田中正男、飯塚篤之助、塚本繁松田中善雄、石塚秀次郎、木暮理太郎、高橋良之助、吉田喜久治、額田敏、岩田一二、木村一男、原田恭雄、角田吉夫、大澤照貞、百瀬舜太郎、行方沼東、佐野喜三郎、神谷恭、津田周二、采野善次郎、今西錦司、黒田正夫、澤智子、名古屋常治、黒田孝雄、渡邊漸、松方三郎、C. H. Archer 横有恒、小島久太、鳥山梯成

新舊理事送迎會

長い間本會の爲めに獻身的努力を盡され、今年度より退任される方々と、今後大いに活躍さるべき新任の理事諸氏との送迎會は一月十二日午後六時より虎ノ門晚翠軒に於て開かれた。別に四角張つた挨拶などは抜いて頭に白雪を戴く老人達と其の子供より若い人々とが和氣藹々として山と會を中心に語り合ふ様はハタの見る目も美しい位だ。

退任されし理事の中秋田に轉任された藤島君と大阪の加納君、新任では高橋君が旅行中で見えなかつたのは淋しかった。

和漢洋の酒に心よく酔つて後は別室に移つて樂しかりし一月の山行を語る者、三月のスキーを計畫する者會の事務を打合せる者等。

最後に茨木氏が記念に皆の似顔を書き、又之を中心にして「之は余リヒドイ」とか「ギヤング見度い」だとか爆笑が湧く。九時終つて三々五々歸途につく。終りに臨んで多年本會に盡力され今般退任された鳥山、藤島松方、渡邊、加納の五氏に厚く感謝の意を表すると共に新任の黒田、松井、額田、福島、高橋の五氏の努力を希望する。當日の參會者左の如し鳥山悌成、松方三郎、渡邊漸(以上退任)黒田孝雄、松井幹雄、額田敏福島昌夫(以上新任)、小島久太、高野鷹藏、高頭仁兵衛、近藤茂吉、木暮理太郎、冠松次郎、横有恒、茨木猪之吉、神谷恭、中原繁之助、松本善二、角田吉夫、田中管雄



説明——新舊理事送迎會席上に於て——茨木猪之吉氏畫

(上段左より)缺席者は藤島敏男、中原繁之助、渡邊漸、高頭仁兵衛、小島久太。(二段目)松井幹雄、冠松次郎、鳥山悌成、松方三郎、高野鷹藏。(三段目)額田敏、近藤茂吉、田中管雄、茨木猪之吉、横有恒。(下段)神谷恭、福島昌夫、黒田孝雄、木暮理太郎、松本善二、角田吉夫

於富士山故土屋勇氏遭難報告

内田 勇 三

内田勇三、故土屋勇、後藤宗七、渡邊良太郎、福澤億之助、内田勇四郎

昭和七年十一月廿六日、曇一雨一夜快晴 気温甚高し、内田兄弟、土屋、福澤の四名先發す 新宿(六・二二)吉田(九・三〇)大石茶屋(一一・〇〇)一五合目(二・三〇)大石茶屋附近より積雪あり、五合目積雪量約八〇糎なり。

天候、午前十一時頃より霧雨降り、午後二時頃には相當の雨量となりしも、午後四時頃全く止む、風は西北の弱風なり。日没と共に風稍々烈しく雲霧全く去りて、満天に星の輝きを見る、されど気温著しく高く、午後八時に至るも十^〇にして軒の滴音夜半に至る迄續けり。

雪質、前數日の晴天の爲良く緊り居りし雪は、降雨の爲め、全く濕潤軟雪と化し、スキーを穿たざれば膝を没する程度に落ち歩行困難なりき、内田(兄) 午後四時五合五勾附近に至りて觀察せしに、雨は相當上方迄影響を與へしもの、如く思惟せり。

△午後十一時勤務の都合上後發せる後藤、渡邊兩君、深雪を冒して五合目に到着す。

廿七日 曇一小雨一夜晴

約二千四百米突の高度に於て靜穩なる雲海をなし、上方は薄曇にて雲高く、時々陽光を見たり。眺望よし。

頂上を除きては北西の微風にして気温比較的高し。午後三時頃より雲海亂れ、午後四時に至りて小雪となりしも夜に入りて止む。

午前四時五十分五合目出發。雪質は気温高き爲堅硬なるクラストを形成せず、五合五勾附近迄は時々膝近く迄雪中に没する事ありたり。夏季登路に從つて登高す、六合目附近より漸く堅く、歩行安易となれり、七合三勾附近に至りて鐵柵道の處々に積雪の水化せるを認めれば、全員シュタイグマイゼンを穿つ午前八時なり。八合目迄は處々に着氷を見たるも概して雪質良好なり。天候靜穩にして殆んど風なく、脚下の雲海上には八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳より遠く北アルプスの連嶺を望み得たり。懸ては崩る可き天候なるも、激變なく、五合目躰着の豫定時刻迄は充分靜穩を保つ可しと思惟せり。

七合五勾附近にて第一回の食事を攝る。気温高く手袋を脱して寫眞の撮影をなし得る程なりき。八合目着午前九時半。小憩。八合目以上は雨の影響を認めず、雪質はシュタイグマイゼンに最も適當せる状態なり。風亦殆どなく登高容易なれば、ザイルを使用せず。

頂上久須志神社着午前十一時。気温-8。火口壁上に出づれば風強し壯大なる奇觀に接して一行の元氣愈々旺なり。午前十一時三十分頂を辭

し、夏道の側の長大なる斜面を眞直ぐに下る。堅硬なる凍雪面に混へて稍々軟き部分ありたり。シュタイグマイゼンの下に雪塊附着する事なし八合目歸着。午前十一時五十分少憩す。

若氷の部分もなく、岩礫もなく、傾斜も比較的緩にして(約二十五度位ならんか)歩き易ければ、積雪期登山者が屢々下降路に擇ぶ大澤(吉田町の通稱にして夏季砂走りの道なり)を下る事とせり。午後零時十分土屋、内田(兄) 渡邊、福澤、内田(弟) 後藤の順にて、八合目小屋より斜に大澤に下れり。殆ど無風状態にて、気温比較的高く、特に寒氣は覺えざりき。スカブラは全々なく、太陽、雨の影響を受けたる雪面は平滑にして適當の硬度に凍化せり。處々小部分なれども、雪質異り、クラスト薄く踏めば靴を没する處ありたり慎重に下る。

約標高三二五〇米邊迄斜に下りたる時、先頭にありし土屋は、如何なるはずみなりしか、クラストの薄き部分に入りて靴を雪中に没したる拍子に身體の安定を失ひ、前にのめらんとするを耐へしも、遂に横に倒れたり。顛倒と同時に彼はヒツケルを以て滑落を防がんとし、約一、二間程滑りたる時、良くゼッソを雪中に突き立てたり。されど不幸にも手離れて、ヒツケルのみ空しく雪上に残り、斜め上にありし一同は爲す術もなく、滑落し行く彼の姿を唯呆然として凝視するのみなりき。瞬時にして彼の姿は七合目附近の岩頭の露出せる急斜面の後方に見えずなりぬ。時十二時二十分なり。

後藤をして直に滑落痕を辿りて下らしめ、内田(兄) 他の三名と共にブリズムを以て彼の姿を求めつ、山稜上を下る。呼べども答なし。七合目附近の急斜面下にて滑落痕消えたりブリズムを以つて山稜上より尋ねれば、稍々下方に雪上に血痕を認む。後藤其を辿りて急行し、シュタイグマイゼンを付せる靴(左)及靴下を發見す。約標高二五五〇米附近六合六勾小屋の西方四、五十米の等高線上に至りて、雪上に彼の姿を發見す。一行中の慶應醫學部生福澤、内田(弟)直に檢診せしも既に空し、顛頂骨複雑骨折を以て即死せしものと斷定す。午後一時なり、渡邊、内田(弟)を遭難急報の爲、直に下山せしめ、他の三名は遺骸を六合五勾小舎へ運び、折柄下山し來れる日大山岳部藤田、廣田兩氏の助力を得て、小舎内に安置す。此頃より霧立ち込めて天候險惡となれり。午後三時半急報に依りて、五合目より五合目小屋主、池谷、登山者、森、高橋、伊藤、福島、拓大山岳部、豊吉、渡邊、河野氏來援す。直に丸太橋を急造し諸氏の助力に依り小雪降り初めし中を五合目小屋に下る。午後六時小舎着。夜入夫堀内來る。

廿八日晴午前八時、慶應山岳部、三井、渡邊(榮)兩氏來る。午前十一時、令弟武満氏、慶應山岳部、渡邊(英)谷口、金山、中村四氏來る。午後一時、一同遺骸を護りて山を下り午後二時馬返着。遺族、吉田町有志並に友人一同に迎へられて納棺す。自動車にて吉田町を経て午後十時土

屋家に着す。

附記 今回遭難に際し、御盡力下されし諸氏に厚く感謝の意を表す。其事情原因の如何に拘らず斯如きアクシデントを惹起したるは、自らの足らざるに基くものにして、深く遺憾とす。將來の精進を誓ふ次第なり

御通知

事務所移轉
一日より本會事務所は芝區琴平町二、不二屋ビルに移轉致しました。會宛一切の通信は右へ願ひます。

會費
二月末日までに可成振替爲替にて御拂込み願ひます。尙本年度は三月より集金郵便制を採ることとなりました。御了承願ひます。

入會金分納
新入會の入會金五圓及び會費年額六圓を分納出來得る様規則が改正になりました。

入會手續
本年度より入會は會員二名の紹介のみにて申込出來る事になりました。(従來の評議員一名の紹介を要せず。)

特製繪葉書
「山岳三十七年三號、扉繪、石崎光緒氏筆「クロユリ」が新たに出來ました。價一枚五錢。送料本會負擔。



研究欄

コバに就て

細野重雄

山岳七年一號に、鶴殿氏は秩父山中にコバといふ處があつて、それが木を挽く所を意味するとして「木場」であらうとせられたが、それに對し武田博士(七の三)は小さな平地乃至場所を意味する「小場」であらうとせられた。鶴野氏(八の二)はそれに對して「工場」であると反駁せられ、武田博士(一四の一)はその後、土地の人の説明に従つて木を挽く木場であらうとせられたやうである。コバとコバは恐らく同じことをいふので、何れかが訛りといつて差支なからう。

生の聞いたところによると、コバの意味を説明出来る人には一人も出遇はれなかつた「憩場」であると明言したものはない。併しコバが固有な名詞でないことは明かであつて、杉林の中などで木を挽いてゐる半坪が一坪位の廣さの平もコバといふし、徑の別れなどの少し徑より廣くなつたところ(休むのに都合がよい所だから休みコバだといふ)もコバであり、山腹に小屋を建てる爲に山を切つて平にならしたところもコバであり、段々島の島一枚々も島コバであるといふ。日本コバの頂上が素晴らしい。之等からコバの有する意味を歸納すると、コバとは山腹乃至山頂の平地を意味することが明かになる。問題はコバの意味ではなくて、コバが何かといふやうな疑問によつて、土地の人の混亂した答を求めることの可否である。この式の質問で面喰ふのは、試験攻めにあつた人達の均しく経験したところであらう。近來、所謂山岳語彙が各地の同志によつて集められてゐることは、誠に嬉しい次第であるが、この式の早まり方がなければ幸ひである。言葉の説明は簡単に記すべきではあるが、簡に失して意味が不明瞭になつしはならないし、下手に抽象すると何の事かわからなくなつてしまふ。語原が明かであれば記するもよかなうが、それよりも使用例や白は對する黒のやうな對應語(雪崩方言の如し)の方がもつと大切であらう。この點で山日記の説明は考慮の余地があらうと思はれるのである。

さてコバのもう一つの意味は、琉球から鹿兒島、宮崎沿岸にかけて、僅かに分布してゐる蒲葵(ピロウ)である。蒲葵は今日でこそ大した木ではないが、平安朝時代には車の飾になつてはならない貴重なものであつたし、琉球では神の天降る聖木なのである。大隅の南端などではお宮の境内だけに大切に育てられてゐるのみならず、その近くにある「大木場嶽」等といふ山のコバが蒲葵でないとは斷言出来ない。勿論山腹の平地といふのではない。今後の報告を俟つ次第である。

スチールエツヂ スキー一考察

三澤龍雄

スチールエツヂスキーに就き種々異論がある様です。然し乍ら使用上効果的である事は先ず壁頭斷言出来ませう。シユナイダー氏が來朝上京された翌日ホテルで紹介されたスキーはヨハンセンニルセンのスチールエツヂスキーでした。其の或る部分を見た時スクリユーの飛んで居たのを記憶して居ります。が當時の加工は其の確信を措く事が出来なかつたと云ふのはスキーのエツヂに約七種巾の鐵板を張り、極めて小なるスクリユーを以つて六種位の間隔でリベットされたもので御座りますが金屬は寒暖に依つて伸縮を庄じます事とスキー滑走中過つて轉

倒した場合等其瞬間的には可成スキーに無理が出来ますので在來のリベットに絶對的信頼を措く事の出来ない理由が御座りました様です。然し乍ら今冬あたりから使用されて居るスチールエツヂの加工は從來と全く異つてスチールは先ずバンドより(雪の接觸面)テールに終りスチールの型は丁字を形成しスキーのサイドより十種位の間隔を保ちリベットされて居る。それから伸縮の場合同差支え無き様スチールのリベットされた穴は情圓形をなして居る事尙丁字型のスチールは全く木部に没して底面には何等の支障なき事等に於て從來のインポートされて居たスキーとの相違點がある様です。以上は會よりの御依頼に對する二議的の問題かも知れませんがスキー登山時に於きまして特にアイゼンを要する位の場所にて或る程度迄スキーに頼る事が出来ませう。又ガタム、雪のハンガをトラバースする時或はスカブラーシユネー又はプレレカアルクラストと云つた様な風や其の他の作用に依り不時の變化に遭遇した時特に滑走時に於て急停止を要する場合等に其の効果は絶大です。尙スキー自體の生命から考察しても亦技術的動作の上於てもエツヂの無きスキーの使用は動作の完全を缺き極めて不愉快なものです。右の點に於て將來可成普及性を持つべきものと思はれます。次にスチールエツヂに重大要素を成す可き材及型につき考察を要する事は此のスキーの生命の一條件であるべきです。總て滑走中スピードを

殺すスキー又は比較的ワツクスの効果ない時こんな原因も亦スキーにある事が可成りあります。(山岳スキーは大方テレンが多い様です。)尙ワツクスとスチールの關係ですがワツクスは礦物及植物性の含有する點から附着度については其の變化が無い様です。以上極めて斷片的なる記録で貴重な紙上を費した事を御詫び致します。 目方の比較 普通スキー一臺(平均) 九五〇目位 スチールエツヂスキー 同 一、一〇〇目位 シュラルミン 同 九五〇目位 プラス 同 一、〇五〇目位 編輯係より この研究欄は會報を通じて會員相互の研究を發表し、大いにディスカッションを交すことを目的として設けられたものです。 問題は多數にあります。登山技術服裝、用具、科學的研究等あらゆる山岳に關する問題の提出と研究の發表を希望してなります。 魔法瓶の携行法に就て 魔法瓶は、登山、スキーに對して非常に便利で効果が大きですが之が破損した時の事を考へると、累々他の物品に及ぼし實にやつかないものであります。何とかして、之に確實なる安全性を與へる事は出来無いものでせうか、會員諸賢のこのテールモスに對する携行法の研究報告を聞き度いものであります。(額田敏) 會員章をおつけ下さい。



圖書紹介

ALPINE DAYS AND NIGHT
By W. T. Kirkpatrick, with a
paper by the late R. Phillip
Hope. (8vo, 198pp)

George ALLEN & Unwin LTD,
London, 1932

アルパイン・クラブ会員ウィリアム・カークパトリック氏が過去三十二年間に渡つて、アルパイン・ジャーナルに發表した紀行、偶感等をまとめたものが本書である。

大きなエクスペディションの報告だが、勇敢な初登攀の戯曲的な記述とかいふやうな華かな書物でもなく、又技術的な新しさを學ぶ賞利の書でもなく到つて、じみなものである。じみな上に各文とも既に發表されたものであるからアルパイン・ジャーナルの熱心な讀者には今更取上げる必要がないかもしれない。

しかし既發表とは云ひ條、日本の登山家の内のブックメイカーが二三年の紀行を纏めて書物にしたのとは違つて、三十余年間に書きためた山行記となれば、殆どその人の一生の記録の集積だと云へる。

アイランド人のカークパトリックとスコットランド人の故ホープ(一九三〇年六月物故)との結ぶパーティが三十余年に渡つて行つた登攀の殆どすべては、ガイドレンスの登攀であつて、しかも足跡は歐洲アルプスの廣汎な地域に渡りながら、ガイドレンスのパーティが犯し易い過失を殆ど行はずに、初登攀のルートの数々を残して居ることは、注目すべきである。

しかもその業績が何等の誇張もされず、むしろ過少評價されて何氣なく記されて居るだけに與床しく感じられる。吾々讀者はむしろストラット大佐の序文の中にこのパーティが死して來た足跡の本當にすばらしい意義を知るのだとさへ云へる。

三十年間の冒険中、何等の過失なく、搜索隊を煩はしたことなく、且二人の友情に變りなかつたといふ成果がすべてを説明する」と大佐は云ふ。

吾々はこの書の「スタインの一週間」以下數章の紀行の中に、つ、ましい著者の筆を通して、種々の冒険を知り得るが、特に「ガイドなしの十年間」と思ひ出の儘に「二章で、この特異なパーティの氣持なり、行動なりをよく知ることが出来る。

「ガイドなしの十年間」の方は一九〇五年にアルパイン・クラブで行つた講演の原稿だが、こゝでも著者は謙遜して、

「自分は決して遠い國の探險をしたわけでもなく、新しいピークに登つたこともない。ただあり來りの山にあり來りのルートで登つて居るに過

ぎない。時に新しいルートに依ることがあるとしても、むしろそれはどちらか正しいかを知らずに登つたまぐれでやつたことだ」と云つてパーティがやつて來たことが單にガイドレンスといふ特色を持つに過ぎないと述べて居る。

ガイドを伴ふ登攀の安易さの内に快味を満喫し得ないで、あくまでガイドレンスに依る登頂の快味を求めて「私は大きな山にガイドを伴つて登るより、登つた所で大したことのなかつたらぬ峰に獨力で登つて楽しんで、どんなに多いか知れない」と云つて居る。

その熱情は必要と結びついて、色々の精密な研究を促して、當時としては類の少い周到な注意を行つて居るのは注目される。例へば二人きりのパーティが持つ危険に對する處理などが、自分達が荷を全部負はればならぬために、如何に荷を軽くするか等々についての研究などがそれである。この章の末尾に示した用具や食糧の精密な重量計算に、特別な器具を用ひて一オンスでも軽くしやうと試み、僅し一オンスの絹カラーや3/4オンスの眼鏡とそのケースの重量までも計算し、一本の鉛筆さへも適當なものを考案しやうといふ努力なのである。當時にあつてこれ程まで力を傾注して、あくまでガイドを排し、獨力でホールドを見出し、二人きりの頂の休息を持つ快さを思慕したこのパーティの熱情は吾々を驚しがらざる。

「思ひ出の儘に」の中でも、その終りて、

「年老いた今、ガイドを伴はずに行ふことは、若い元氣あるガイドの助力を得て登る人達に較べて遙に辛いことだ。しかし長い間、ガイドを伴はずにやつて來た吾々には、今更職業的な援助なぞ求めやうなとは思へない。従つて今では吾々の登攀は次第に低い山歩きや米河旅行に移つて行く」とさへ述べて居る。

三十年間斷乎として變らなかつた鋼鐵の信念が吾々に何物かを教へて呉れる。

ガイドルストンを著者は「ガイドレンス登攀の父」と呼んで居るが、著者自身とホープとのガイドレンス登攀こそストラット大佐の云ふやうに「ガイドレンス登攀の新舊を境する分界線」をなすものだ。

單獨登攀、カイドレンス登攀に憧れる若き人々にとつて、この地道に、そして本當に自分達の内心の欲求に従つて、殆どその生涯をガイドレンスで登攀しつづけた二人の足跡は尊敬されやう。

その點でこの書は愛されてよいと思ふ。

尙本にはホープの遺稿「孤獨の登攀」とカーパトリックの「ホープの追想記が收められて居る。寫眞十二葉。(島田 巽)

G. R. de Beyer: Alps and Men,
1932 Idn. Early Travellers in the
Alps の著者の近著である。副題に
Pages from forgotten diaries of
travellers and Tourists in Swit-
erland とある通り、また序文にも
云つてるやうに本書の目的は、「藝術

及文學に於けるアルプスのテーマ」や「登山の歴史」やを取扱つたのでなく、一七五〇—一八五〇年の間にスウキスを訪れた人々の足跡をたづねるのにある。そして、この人々の「忘れられた日記」を「鉄と糊」とによつて編輯したものが本書の生立であるのを見れば、ド・ベアが前にアルパインジャーナルに感ぜしめたと同じ「失望」を今度もおかしめてゐるのであるまいか。

これに於て來る人物は、種々雑多で、イギリスの貴族、亡命者、軍人も居れば、科學者、探險家、詩人、文士、作曲家等である。極少數の例外を除けば、彼等は、あくまでトラヴェラーでツトリリストであり、アルプスといふよりもアルプスを背景としたスウキスを遊山的に歩いた彼等であり、従つて山そのものに對してはむしろ、パシーフに振舞へる彼等である。だから、こうして人々からのスウキス(廣くは山岳)に對する感想、印象は、かの「黄金時代」にアルプスの諸峰を次々へと初登頂して行つた人々のそれに深く共鳴する人々にとつては、却つて物足りなさを感ずるものではなからうか。むしろ私の面白く感じたのは、古い文獻から覆寫した、時代的繪畫であつた。

臺灣出版 第六號 (TK生)

臺灣出版 第六號

本文には、大湖尖山、次高山、等の登山記があるが、全體として何だか物さびしい。寫眞の出來も感心しない、昭和五年十月第五號が發刊されて、久々の談面ではあるが、今度から、横組になつたが、別に新しい

味が見出されない。組方が込みすぎ、讀みにくい。却つてたて組でゆとりのある前の方がよかつた。

(TK生)

山岳寫眞のうつし方

額田 敏著

光支莊發行 昭和七年十二月十九日 定價二圓 四六版二九四頁

刊頭に四十圖の四季ととりどりの山岳寫眞が掲げられてゐる。皆どれもすばらしい。仲にはいやになる程カツキリとテイテールの現れたものもある。之だけの腕前のある著者の著したものでなければ、買ふものもこの内容に信頼出來やう。

内容は山岳寫眞を目的としてカメラの撰擇より初まり、撮影、處理一切に及んでゐる。舶來の新らしい乾板フィルム各種とフキルターの關係について詳説してゐるのは勿論。山岳寫眞と平地寫眞とを、テクニツクの上にてどこで區別するか、自分にはわからない、然し本書はあくまで山岳人が山岳を念頭に於て、書いてゐる點及び山岳人としての強い主觀的な著述に敬服してゐる。

(角田)

スキー

泉掬次郎著 大村書店 四六版 九九頁 一圓

スキー術の難解なる説明を簡易化する點に著者の主張がある。アールベルク全盛の折から、此派を至上のものとして、ノールウエーの長所も併せて記述してゐることは、賛成である。

内容はスキー術の第一歩とワツクス及杖との關係が主となつてゐる從

來のスキー教科書にある圖解と共にペン畫のスケッチによる説明は解り易く、成功である。寫眞説明は不鮮明にて失敗、巻頭の雪の寫眞はシェネーハーゼよりの轉載であると思ふと不愉快になる。

(角田)

アルペン・カレンダー

(一九三三年版)

發行所 シヤパン・キヤムプ・クラブ、菊判定價八十錢

山と溪谷社の物をスベーマンに例へるならば、さしづめこれはプロテイクものだ。と云つても語意をその儘受取られては困る。ゆき方をたえてみるなら、まづそんなところだらう。

著名山岳畫家の作を三色版やオフセットで寫眞版の合間に挿入してあつたり、その寫眞版が新奇とか珍品とかいふよりも、寧ろ繪畫的效果を第一に選擇されてゐる點、編輯者の眼つたであらう大衆性をよく發揮してゐるし、値段もまづ安い。しかし撮られてゐる山が主に立山と穂高であるためか、感じが一方的で、季節の推移と山の多角味を覺えざる變化が缺けてゐるし、ダブルトーン印刷の寫眞版が、すつきりしないのはこのカレンダーの難だ。(馬渡)

陸地測量部地形圖

五萬分一地形圖修正

夕張嶽 四號 札内嶽 一面

甲府 十一號 飯澤 一面

金澤 八號 經ヶ嶽 一面

五萬分一地形圖鐵道補入

函館 十一號 木口内 一面

岩内 三號 俱知安 一面

山の消息

阿寒登山者數

北海道阿寒の登山數は近年激増し一九三二年度三八七二人といふ。

雌阿寒 男三、〇〇一 女五一七

雄阿寒 男三、一四四 女四八八

全體として前年より八九九人増加 (一一、三〇劍路新聞)

富士山に登山ホテル

御殿場口二合八勺にホテル建設の出願あり、豫算五萬圓石造コンクリート建、總建坪一二七坪餘、六月末完成の豫定(東日、一一、二)

島々ロスキー登山案内

北アルプスの島々案内組合では組合員五十名中より十五名を選び冬季案内人の資格を與へた。尙案内人夫の分別をなし、強日力給一圓三〇錢、案内三圓六〇錢と決定(信毎十二月三日)註、案内人夫の日常の差が大き過ぎる憾あり、詳細問合せ中。

伯耆大山のスキー小屋

岡山スキー山岳會にて大山中ノ原に四間五間のスキー小屋建設の計劃あり、今シーズン中に完成の豫定。(十二、七、山陽)

冬の湯

一泊三食付一圓にて今冬中ノ湯は臨時營業を行ふ。(讀賣)

富士吉田口の料金

富士遭難防護會發表
山小屋、五合目一泊三食付一、五〇
馬返一泊三食付一圓、食事抜五〇、

案内人、頂上まで一泊二日四圓、一日増毎に五〇錢、五合目まで日歸り一、五〇、一日増毎に五〇錢

註一日増毎に五〇錢の制度は登山者にとつて有難い、北海道の小屋料の制度に似て、賛成也。(國民十二、八)

十勝岳の新ヒュッテ

十勝岳スキー場に目下建設中なり小屋開きは一月下旬の豫定。註位置詳細不明、現在は泥流跡に休憩小屋あり。(小樽十二、十四)

白馬八方尾根黒藥小屋

細野案内人組合にてスキーヒュッテ新設、四間に二間、一泊三食付一圓五〇錢、收容二〇人、距離細野より三時間—五時間(十二、二三、都)

霧ヶ峰ヒュッテ

信州霧ヶ峰高原のヒュッテ完成す收容百名、食堂浴場其他備、一泊一圓五〇錢(十二、二五、都)

手稻山右俣小屋

北海道手稻の東麓に札幌頃眾會は右俣小屋を新設す。十八日小屋開き舉行(十二、廿五、北海タイムス)

立山案内料値下

大山村は冬山に限り案内料金を一割下げて二圓となす。尙村の民家は一泊三食八〇錢にて一般に公開す。(十二、廿七、大毎富山版)

定山溪ヒュッテ

札幌近郊ヘルウエチアヒュッテの近くに、定山溪バスで新ヒュッテを建つ(十二、二八、時事)

J・A・C 學生有志晚餐會

十二月十九日午後六時より日本山岳會々員學生有志司會にて新宿百十字に於て懇談會を開く。最初の試みなるも非常なる盛會であつた(次號参照)

會員大會

十二月十日午後五時より溜池三會堂に於て開催、七年度會務報告に次で講演あり、松方、角田、山小屋に就き語る(四頁参照)

日光雪沼の遭難

一月二日ドイツ人J・R・テンク氏(三七)夫人同伴金精峠より雪沼に下り、沼に墜落、三日死體發見す。

藤原便り

上州武尊山の北西麓、上の原のスキー場を持つ藤原は今般農家を解放し一泊三食付五〇錢にて雪沼の便を計ることとなつた。現在二〇人分の設備あり、問合せは利根郡水上村藤原久保、林主税宛のこと。

登山團體調査追加

▼神戸蹴渉會 神戸市湊西區湊町三丁目一三、代表者秦淳美、創立大正九年三月十日、會員十二名、會報「峠」毎月一回發行。

日本醫科大學山岳部

a 東京市本郷區千駄木町日本醫科大學内 b 戸塚武彦。一九二五 d 六〇名 e 植年一乃至二回。

宇都宮山岳スキークラブ

前號に宇都宮スキークラブと發表せしめ訂正す。

會員通信

北海道より

十二月二十二日より例年の如く、十勝山麓吹上温泉に於ける北大山岳部の合宿に参り、幸ひ、今回も天候に恵まれ同温泉より一日行程にある富良野、美瑛、十勝、上ホロカメトツク等登る事が出来ました。

三十日温泉を下り引續き十勝川ニベソツ山へ登るため本日屈足に参りました。今冬は稍雪不足の模様にて妙からず懸念致して居ります。尙他の一隊は戸蔭別川より幌尻岳方面へ向ひました。(七、一二、三一、徳永正雄)

臺灣清水山(二四〇七米)

臺灣では第三流第四流の山ですが東海の斷崖の最高點をなす、恐らく日本一の石炭岩の山です。陸測圖では最近「カックツ」として發行されました。

昭和七年十二月二十九日臺北發、同行臺灣山岳會の齋藤三男、今野三郎兩氏、蘇澳より船にて翌三十日花蓮港に上陸、自動車にて逆行し、清水駐在所に到り同日は石碇子溪を探る、第十一日案内人夫なしにて地圖に路線を示す尾根を登り途中水無焚火なしの野營(凡一五四〇米)、元且は頂上南のサカゲン社蕃人の小屋(二二六〇米)に泊偵察二日登頂、中央山脈の大觀を望にし一氣に清水駐在所迄下り泊、三日自動車、汽車にて臺北に歸りました。何しろ海から頂上まで一步も氣をゆるせない岩山です。いづれこの山は再三つづい

て見たいと思ひます。(一月五日臺北にて沼井鐵太郎)

穂高白出澤より

二日の快晴に鳥田武時君と大倉辨次を伴ひ白出のテントより白出を登り、瀧の所にて唐澤岳山頂に出て瀧谷と分つ尾根に取付き唐澤岳を経て穂高小舎に泊り、三日は白出を降る事を希望してゐましたが此の日の白出の積雪状態が悪いため斷念して奥穂高往復の後潤澤に降り上高地に出来ました。

三日 午後二時半潤澤山小屋建設豫定地の状態は

Table with 3 columns: Date, Weather, and Location. Includes entries for 1933年度集會日程 and specific dates like 2月1日, 2月2日, etc.

一、積雪九尺
二、氣温零下十一度
三、雪崩の痕なし
日光湯元に
三日奥日光に参りました。外人夫妻遭難のため捜索隊に加はり困難な二日を送りました。詳細は新聞にて既に御承知の事と存じます。これは近頃ない輕舉妄動でした。死者をムチ打ちたくない故この位にして

置きます。此遭難の顛末は山岳人には参考にもなりません。(八、一、七伊東)

鳥帽子、東澤、赤牛岳

十二月廿五日 曇後晴 大町一濁小屋。廿六日 曇 二二〇八米三角點まで雪踏み、荷を置く。廿七日 曇小雪 濁小屋(八時)一鳥帽子小屋(二時)全部輪カ。廿八日 曇 小屋(八時半)一南澤岳(十時二十分)一南澤谷本流と一の合流點より百米許り一ノ澤入り。合流點より四、五町にして東澤谷と黒部本流との合流點に達す。雪五尺廿九日 東澤本流偵察、架橋、卅日休養、卅一日快晴午後吹雪三ノ澤出合まで。一日吹雪。

一月二日 快晴 新雪二尺 小屋(六時)一中小屋深(十時)一スキーテボ(中小屋深の瀧)一中小屋鞍部(〇時半)一赤牛岳(一時五五分)一小屋(五時二十分)

一月三日 曇 一ノ澤小屋(九時)一南澤岳(〇時二十分)一鳥帽子小屋(二時十分) 四日 小屋(七時十五分)一(大町(午後四時))

スキーは濁小屋より河原の間、尾根に取付くまでの間とマチ立尾根の二三〇〇米より上と、一ノ澤の一九〇〇米より下流の谷底、東澤谷本流全般に互り可能は全部輪カ又はアイゼンの領域。

誤りにて東澤と黒部との落合より四〇〇米上の東澤に落流するものには、谷の走向は最初西北に向ひ如何にも黒部本流の口元木挽谷附近に落す如く見ゆるも下方に於て著しく曲風致し、東澤へ合流する附近の一ノ澤の走向は西微南を指す。御参考までに(一、六、小池文雄)

冬の鳥海

今冬登山せし鳥海山の概要左の如し。(一月一日)遊佐驛一上蔵岡(二日)上蔵岡一杉澤一横堂小屋(四合目風來山北の鞍部)小屋附近の積雪約四尺(三日)吹雪を冒して森林中のラッセルをなす(四日)小屋附近にてスキーを練習(五日)小屋(九、一五)一スキーテボ(八丁坂下一、三五)一行者岳(三〇〇一三、二〇)一七高山(三、四五一三、五五)一スキーテボ(五、一五)一小屋(七、一五(六日)小屋(一一、〇〇)一上蔵岡(三、二〇一四、〇〇)一遊佐驛(五、一五)

小屋迄は夏路通り進み得れど小屋より上は適宜アツシユ少き個所を選んで上る。小屋より樹帯を抜ける迄約二時間、この附近より仰ぎたる火口壁は實に雄大にして乗鞍の比に非ず。スキー脱ぎし後も相當雪深き處あり、スキーテボは或はもつと上方となす事も得ん。火口壁の登りも地圖に依れば大分急なるも實際はさしたる事なし。但し氷化せる時はザイル必要ならん(今回は使用せず)

脚下に浪打聲を見乍粉雪を飛ばすは今迄に経験せざる處、甚だ快適なり。

天候は相當悪し、我等の登頂せし五日も午前八時頃より霽れたり。人夫は全然スキーを履かず、輪カノシキの爲行程頗る遅々たり。勿論登頂の際は同行せず。小屋は二間一四間にして昨年夏新設なれど不完全のものなり。委細は「山岳」に發表の豫定。(田中菅雄)

山小屋委員會報告

十二月九日 午後六時於圖書室出席者 松方、渡邊、松本、黒田孝角田、今西錦司。田口一郎、澤本辰雄、清田清、國鹽研二郎、初見一雄、小川登喜男、本郷常幸、横尾直行、赤木一彦、佐々木繁治、鳥田武時、他數名

當日の議題は今冬の潤澤に於ける雪崩積雪量及氣象調査の實行方法と山小屋建設後の經營管理方針に關する研究の二項目であつた。一、今西氏より雪崩氣象調査票の記入方法の説明あり。次で雪崩の觀察方法に關する講演あり。一、右調査のため調査表の外に、横尾谷の概念圖及潤澤より見たる穂高連峰のスケッチを作成することに決定、田口、小川兩氏一任す。

▲山小屋設計圖 瓜生正氏に依頼中の設計圖及費用見積書十二月十七日出來せり。圖書室に於て松方、黒田、額田、角田集合、瓜生氏より説明あり。詳細は會報二月號に發表の豫定。



會務報告

一月二十日臨時役員會

出席 小島 近藤 高頭 茨木
 福島 角田 黒田 松本 額田
 松井 横 神谷 木暮 島山
 浦松

山小屋委員 松方 渡邊 瓜生正
 一、山小屋建設費六千圓を計上、基金以外の金額募集方法につき協議
 一、募集金一口二圓として會員より寄附を求めらる

一、基本金の一部を借入れ、建設費に當て、追つて返却のこと承認
 一、瓜生氏より小屋設計圖及び工事豫定につき説明あり

一月二十日定例理事會

出席 小島 高頭 木暮 茨木
 松本 神谷 黒田 福島 松井
 額田 角山 浦松 田中

一、一九三三年度山日記の件
 形式内容其大體に於て従來通りになす事

二、高山深谷の件

高野氏を主とし新に委員會を設ける事とし交渉は茨木氏に一任。

三、登山経歴表の件

研究調査係に於て近日中に草案を作成す。

理事々務分擔

昭和八年度事務分擔は協議の結果左記の如く決定す。

庶務 田中、横、松本、福島
 會計 神谷、松本
 編輯 伊藤、茨木、松井、黒田、福島
 會報 額田、角田
 圖書 伊藤、黒田、松井
 研究調査 福島、額田、黒田、田中、浦松
 山小屋 角田
 山日記 黒田、額田、神谷、角田、松井
 關西事務一切 中原、津田、高橋

退會者

昭和七年十二月十二日付
 (三七八)京都府立第二中學校

會員計報

登嶽部代表者 中山再次郎
 昭和七年九月二十六日逝去

(一四八) 福岡市 大野源五郎氏
 本會は茲に謹而哀悼の意を表す。

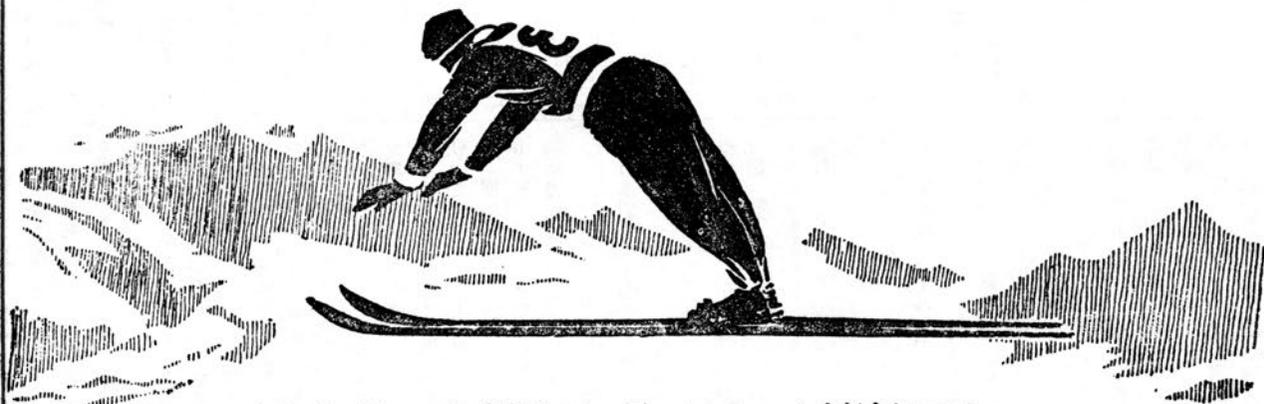
新着圖書

RCC報告 (第五號) RCC
 年報 (第一號) 横濱山岳會
 岳樺 (第十一號) NG山岳會
 霧の旅 (第四十號) 霧の旅會
 臺灣山岳 (第六號) 臺灣山岳會
 袖 (第四號) 日本醫大山岳部
 スキーと山 (昭和七年號)
 東鐵スキー山岳部
 部報 (第二號)
 關東アルペンスキー俱樂部
 飛騨史壇 (第七號)
 黒木立(第八十一一號)關東岳愛會
 登山とスキー (十二月一號)
 山と溪谷 (第十七號)
 山小屋 (十二月及一號)
 器械操縦規程規定並競技種目
 全日本體操聯盟
 全日本體操聯盟規約並役員住所録
 同 上
 ツクリスト (一月及十二月號)
 臺灣山岳彙報 (十二號)臺灣山岳會
 山嶺 (一月號) 東京野歩路會
 東京山岳聯盟報告 (第二號)
 旅行 (一月及十二月號)
 東京旅行クラブ
 ゼフリ (三號) 福岡山の會
 しうかんば (第九一十號)
 みなかみ (一號) 都島工業山岳會
 昭和三ツツト俱樂部會報 (一月號)
 アルカウ趣味第一號日本アルカウ會
 岳友 (第九十六號) 日本岳友會
 山彦 (一月號) 東京山彦山岳會
 踏跡 (第十號) 東京登山旅行會
 東京アルカウ會々報 (十二・一月號)
 山 (十二月及一號) 横濱山岳會
 ヘルケ(第十四一十五號)岡山々岳會

山の旅會々報 (第三十號)
 RSC部報 (十二月及一號)
 明峰山岳會月報 (二月號)
 豊島登山俱樂部報 (十二月號)
 東京登歩溪流會々報 (十二號一號)
 關東山岳會々報 (一號)
 九州山岳聯盟報告 (第六號)
 廣島山岳會々報 (十二月及一號)
 日本登高會々報 (十六號)
 白樺旅行會々報 (六號)
 神戸アルペン會々報 (一月號)
 Alpine Journal Vol. XLIV No.245
 Nov. 1932
 Bulletin Appalachian Mountain
 Club Vol. XXVI No.3/4 Dec.1932
 The Mountaineer Vol. XXIV/XXV
 No. 13 No. 1 Dec.1932
 The Scottish Mountaineering Club
 Journal Vol. XIX No. 114 Nov.
 1932
 The Geographical Journal. Vol.
 LXXX No. 5 Nov. 1932
 Trail and Timber Line No. 170
 Dec. 1932
 The Prairie Club Bulletin No. 221
 Dec. 1932
 Die Alpen Vol. VIII No. 11 Nov.
 1932
 La Montagne C. A. F. No. 243
 Nov. 1932
 Unione Ligure Escursionisti. Anno
 19 No. 11 Nov. 1932
 Butlletí del Centre Excursionista
 de Catalunya Any XLII Num.
 450 Nov. 1932
 Natural History Vol. XXXII No.
 6 Nov./Dec. 1932
 Mededeelingen Der N. A. V.

<p>Tweed Aflerberg 1932 Fritof Fryxell :- The Teton Peaks and Their Ascents 1932 Zeitschrift des Deutschen u. Osterreichischen Alpen-Vereins 1932 會員寄贈圖書 藤原咲平著 氣象と人生 鐵塔書院 以上 黒田孝雄氏 額田敏著 山岳寫眞のうし方 以上 額田 敏氏 鹿野忠雄著 臺灣産高山蝶(七)</p>	<p>圖書開室 日曜變更あり 月水金(夜間)P.M.五時—九時 火木土(晝間)P.M.一時—五時 但、祭日第二木曜開室 (注意) 従來の日曜開室を取止め 理事在室日の當番制を廢しまし た。事務員小澤亮氏は右の時間 には在室しておりませぬ。</p>	<p>以上 鹿野忠雄氏 Fanny Bullock Workman and William Hunter Workman :- Ice-Round Heights of The Mustagh 1908 Peaks and Glaciers of Nun Kun 1909 The Call of the Snowy Hisspar 1910 Sir Francis Younghusband :- The Epic of Mount Everest 1927 Dr. Gottfried Merzbacher The Central Tian-Shan Mountains 1902—1903 1905</p>
<p>George Irle Finch :- The Making of A Mountaineer 1924 T. G. Bonney :- The Building of The Alps 1912 Jenny Visser-Hooft :- Among the Kara-Korum Glaciers in 1925 1926 Sellenberg :- Der Ruf der Berge 1925 以上 松方三郎氏 購入圖書 Christian Kluecker :- Adventures of An Alpine Guide 1932 G. R. de beer :- Alps And Men 1932</p>	<p>編輯後記 今年度の會報編輯は額田敏氏と私 が當ることゝなつた。十二頁擴大の 折から、理事に新任早々、面倒な任 事を受持つのは、蓋し山の遭難に等 しいものだ。 今西氏の「山岳講話」は今後毎號續 けられる豫定である。又研究欄の材 料も送つて下さる事になつてゐる。 會報二月號は「山小屋號」とも稱 するものを計劃してゐる。 本號と共に御送りしたカードは會 務の覚え書であると共に、會員の資 格證明書として作成した(角田)</p> <p>昭和八年一月二十四日印刷 昭和八年一月二十五日發行 編輯印刷人 額 田 敏 發行所 日本山岳會 東京市芝區新平町二 番一號ビル 大東 阪 淀 屋 橋 名 古 屋 大 須 門 前 東 京 小 川 町 通 京 都 南 須 四 條 日 本 大 東 神 戸 元 町 通 太 阪 南 日 本 橋</p>	

美津濃のスキー用品



山のスキー國 スイス競技のスキー國 ノルウェーから新らしいスキー
用具が常に推つて居ります。美津濃の各種用品も斷然是等に挑戦して優
秀を争つて居ります。スケート用品もアメリカ、カナダ、スウェーデン等か
ら輸着致して居ります。何れも他店の眞似られないもののみです。御用
命御待ち致します。

大 阪 淀 屋 橋 名 古 屋 大 須 門 前
東 京 小 川 町 通 京 都 南 須 四 條 日 本
大 東 神 戸 元 町 通 太 阪 南 日 本 橋